

早引節用集B類諸本間の増字本文の派生関係

——語順の異同を手がかりに——

佐藤 貴裕

本稿は、早引節用集諸本の系統関係を再構成する試みの一環である。

早引節用集B類とは、大坂の書肆・渋川与市・村上伊兵衛らが刊行した『^{増字}早引節用集』（宝暦一〇年刊）の本文をひきつぐ異本群の名称である。その内部は、増字（増補）のないもの（狭義の早引節用集B類）、『早引残字節用集』（天明五年刊。C類。以下『残字』）の本文をもとに第一次の増字を行なったもの（BZ類）、さらに他本により第二次の増字をおこなったもの（BS類）、の三類に分かれる。^{〔注1〕}このうち、B類諸本すべてに共通する『^{増字}早引節用集』をひきつぐ非増字本文については佐藤（一九九九）で二応の検討を行ったので、^{〔注2〕}本稿では第一次の増字本文について検討する。

一 資料と方法

本稿の対象を一覧すれば次のようになる。これは、B類諸本のすべてを示した佐藤（一九九九）の一覧表から、第一次の増字本文を有するものを抜き出したものである。^{〔注3〕}なお、諸本の所蔵者は、『残字』が佐藤武義氏、他は筆者である。

早引節用集C類

○早引残字節用集

早引節用集B Z類

天明5 大阪

美濃半切・横

⑩ 大全早引節用集

寛政8 大坂

美濃半切・横

位 再版多し。

⑪ 世用早引大節用集

文化6 尾張

美濃半切・横

意

⑫ 増補二体節用集

天保13 江戸

美濃半切・横

伊 他に金花堂本(刊年不記)あり

⑬ 大全早字引節用集

天保14 伏見カ

美濃半切・横

位

⑭ 大全早字引節用集

天保14 伏見

美濃半切・横

伊

⑮ 増補再刻大全早字引節用集

安政6 伏見カ

美濃半切・横

位

⑯ 増補手形用文早引節用集

慶応2 江戸

袖珍・横

伊

⑰ 増補数引いろは節用集

—— 江戸

美濃半切・横

以

⑱ 伊呂波引大全節用集

天保14 大坂

美濃半切・横

伊

早引節用集B S類

⑲ 増補音訓大全早引節用集

嘉永4 大坂

美濃半切・横

以

元治元年再版。

⑳ 早引万宝節用集

嘉永6 江戸

美濃半切・横

威

㉑ 万寿早引節用集

文久元 江戸

美濃半切・横

以

㉒ 万世早引増字節用集

文久3 江戸

美濃半切・横

伊

雑書入二冊本あり

右の諸本のうち、特徴的なものについて簡単に紹介する。⑩は『増字早引節用集』に『残字』の収載語を増補した

もので、本文三三二丁と、厚みのあるものである。本稿でとりあげる多くの諸本は、ほぼ、これを踏襲した体裁をとる。⑩『世用早引大節用集』は、⑩のような本文をもとに収載語を取捨選択、再編したものと目される。⑲『手形用文早引節用集』は小型で、収載語を大幅に削除しているが、収載された語にはB類の第一次の増字と同じものがまま見られるので、本稿でも検討の対象とした。㉒『音訓大全早引節用集』・㉓『万世早引増字節用集』は、第二次の増字を大規模に、また組織的に起こったものである。これに比して、㉔『早引万宝節用集』・㉕『万寿早引節用集』の増字の規模は小さい。

本稿での検討範囲について。右にあげた諸本は、独自に改編をほどこしたものもあるが、語順はもとより各丁での字配りまで⑩と同じものがある。また、⑩には多くの再版本があって、なかには収載語をさしかえたり、用字・語形(「ふりがな」)などが小異するものもある。それらを総合しつつ諸本の派生関係を細部まで提示するのが最終的な目標になる。が、現在のところ、細部についての見通しもある程度は得ているが、筆者未見の異本もいくつかある。そこで、本稿では、ある特定の収載語の語順に注目し、その異同をてがかりに派生関係を捉えるにとどめたい。細部の派生関係を捉える準備としての腑分けの段階である。

具体的方法について。まず、諸本のイ部三声の「一」を頭字とする熟字群(以下「一」などと記す)、夕部四

声「大□」、ム部三声「無□」、フ部三声「不□」、ヒ部四声「一□」の各語群の語順を調査する。この調査で得られ

た異同を手がかりに、諸本の派生関係を検討することになるが、その際、次のような原則に従うこととした。

i 増字本文を提供した『残字』の語順を初源のものとする。

ii 移動した語はもとの位置へもどらない(移動の不可逆性)。

iii 削除された語がもとの語順にもどるようには増補されない(削除の不可逆性)。

iv 増補された語がもとの語順にもどるようには削除されない(増補の不可逆性)。

これらの仮説は、初源の語順がどう変化したかに注目するものである。i は、字義のとおりのことだが、このような措置が可能なのは、『残字』が、早引節用集B類の増字本文と同種のものをもつ異本のうち、もっとも早い時期の刊行だからである。もちろん、刊年不明の異本があり、未知の異本もあるかもしれないので、理論的には『残字』に先行する異本が存在することが考えられる。が、『残字』は、早引節用集の正統の版權(板株)所有者である渋川家・村上家の開版書であり、やはり両家から先行して開版された『増字早引節用集』(宝暦一〇初版)の補遺として性格づけられ編まれたものである。^{〔注5〕} そうした開版事情や編集意図から、『残字』は、他の異本にさきがけて開版されたことは確実であり、また、未知の先行書が存在する可能性も絶無といってよいからである。

原則ii以下は、語の移動・削除・増補によって初源の語順はくずされるが、それらを修復するような編集は原則として起こりにくいと考えてのものである。さらにいえば、修復されたかのように見える現象があっても、それは修復ではなく、より初源に近い異本から派生したと考えるべきである、ということになる。

なお、右の原則は、iをもっとも重視し、以下、ii iii ivの順に重要度は低くなるものとする。普通なら、増補は、それまでにない語が増えるのだから、もっとも大きな変化といえよう。しかし、どの位置に増補されても、もともとあった語の相対的な語順は変わらないことになる。削除はその裏返しで、やはり残った語の相対的な語順はくずれない。したがって、もともとあった語の位置を変えることが、編集の有りようを顕著に示すものとして、他よりも注目すべきものと考えるのである。

なお、任意の二本間の派生関係を考える際、刊行時期の先後を参照することが考えられる。しかし、刊年が明らかでない異本もあり、厳密に捉えるとき、必ずしも刊行年の先後が派生関係の先後に一致しないことも想定される。したがって、以下では、可能なかぎり刊行年を考慮せず、語順の異同にもとづいて派生関係を捉えていくこととする。ただし、『残字』の語順を初源のものとする点は動かない。

二 語順の検討

まず、この項での手順を述べる。各語群の検討の材料として諸本の語順の一覧表を提示する。これは、『残字』の語順を基本に、他の本での増字をおぎなったものを基準(基本語順^{〔注6〕})とする表である。なお、掲出にあたって、通行の用字に改めることがある。諸本の語順は、基本語順と同一位置に同一語がある場合に白丸で示し、同一語が別の位置にある場合は黒丸とし、移動先を示す。異なる頭字の語が介入する箇所は、閉じの二重鍵括弧で示した。諸本の記載順は、おおむね、移動・削除・増補などの特徴が似通うもの同士を近づけるようにした。なお、三本以上の諸本で語順が同一の場合には、もっとも若い番号のものを示し、他の本は注記することとした。

イ部三声「一〇」

最初の検討になるので、詳細に述べる。なお、②③は、この語群にあたる語を収載しないので検討しない。

⑩の派生元から検討する。⑩から派生したとすると初源の『残字』と同じ位置に「一儀・一座」を増補したことになるが、これは先の仮説のうち削除の不可逆性に抵触する。また、②④から派生したとすると「一位」を削除したことになるが、これは増補の不可逆性に抵触する。②④からの派生も、「一架」を増補し、「一位」を削除したことになるが、やはり仮説に抵触する。結局、⑩は、残る『残字』から派生したと考えることになる。

⑩の派生元について。②④・②④から派生したとすると増補語「一位」を削除したことになり、増補の不可逆性に抵

イ部三声「一〇」の語順一覧									
	儀	致	家	座	味	字	紙	架	尾
残字	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑩	○	○	○	○	○	○	○	○	○
②④	○	○	○	○	○	○	○	○	○
②⑥	○	○	○	○	○	○	○	○	○
*⑩	○	○	○	○	○	○	○	○	○

*⑩ ⑩ ⑩ ⑩ ⑩ ⑩ ⑩ ⑩ ⑩ ⑩

⑬・⑭・⑮の派生元は、『残字』としてよいだろう。他のものを派生元とすると、語の移動や削除の不可逆性が抵触することになる。同じ理由で、⑰の派生元も『残字』としてよいだろう。⑱は、基本語順にない語群bの位置が⑰のaと同じであり、「一群・一隊・一占・一抱」の移動先も⑰と同じなので深い関係にあることが知られる。このうち、⑳では、さらに「一入・一花・一色」の移動や「一曠・一

以上の検討結果から、当該本（縦軸）にとって他本（横軸）がどう関係するかを示すと次表のようになる。他本が派生元なら二重丸、語順が一致するなら丸とした。このとき、同一の語順である他の本も示している。たとえば、⑬のイ部三声では⑬を派生元として二重丸を付したが、⑬と同じ語順である⑳㉑にも二重丸を付すのである。スラッシュは当該本同士の対照を、バックスラッシュは対照すべき語群がないことを示す。なお、⑬⑭⑮⑯㉒㉓は、五つの調査語群の語順が全同なので⑬のみを示した。

[illegible]

『残字』↓⑬ ⑬↓⑱・㉔・㉕・㉖ ㉔↓㉕ ㉕↓㉙ ㉖↓㉚

㉚については、⑬と㉔が派生元の候補となる。一本に特定するため両者を比較すると、イ部三声での関係が全同である分、㉔の方が関係が深く、それだけに派生元にふさわしいことになる。が、この全同は不審である。右の表でも

明らかなように、²⁶で語順が全同の場合——たとえばフ部三声やム部三声・ヒ部四声——、かならず²⁹も全同になっている。ところが、イ部三声だけは、²⁹とは全同でなく、²⁴とだけ全同なのである。そこで、²⁴と²⁶のイ部三声の語順について再度検討してみたい。

イ部三声「一□」において、²⁴と²⁶の関係の深さを示すもの——両本に共通し、しかも他の諸本には見いだしにくいもの——は、増補語「一位」である。これが、²⁴から²⁶が派生したことを証するものかどうかを確かめよう。両本の「一位」の前後の語を比較すると、次のようである。論述の便宜のため、¹⁰も併記した。訓・注をばき、通行の字体で示す。

¹⁰ ……海髪 杏葉 音呼 鰻 鰻 刺魚 蜥蜴 威骨（イ部三声、ここまで）

²⁴ ……音呼 海髪 杏葉 鰻 鰻 刺魚 蜥蜴 威骨 一位 因位 錫物（イ部三声、ここまで）

²⁶ ……幾世 倒景 今于 已前 已講 赤袴 例 一位 叮 院使 陸巫 射向 姉 雲脂 意舎……

²⁴と²⁶とでは、「一位」の前後の語がまったく異なっている。その有りようは、²⁴では、¹⁰のような本文の末尾に「一位・因位・錫物」の三語を添えたに過ぎないが、²⁶では大量の増字のなかに「一位」が含まれるという形である。すなわち、²⁴・²⁶に見られる「一位」は、それぞれ、よってきたところが異なると容易に推測されるのである。このような質的な違いが確認できる以上、²⁴と²⁶が「一位」を増字するという一致を派生関係によるものとは考えにくい。したがって、²⁶の派生元として、²⁴はふさわしくなく、¹⁰の方が妥当だということになる。

おわりに

最後の²⁶の派生元の推定は、本稿でとった方法の留意点を明らかにするものであった。頭字を同一とする熟字にかざるの一種の抽象化であり、それを用いて検討・説明するのは理解・明示のしやすさを考慮しての方便である。が、

抽象・方便である以上、実態との対応に注意をいたさねばならないということであった。

今後の課題として、先にも述べたが、本稿の検討範囲は、語順にもとづく派生関係の推定であったので、五つの調査語群の語順が全同だった¹⁰¹⁹²⁰²¹²²²⁵および¹⁰再版本諸本間の派生関係の検討があるのはもちろんである。

〔注〕

- 1 早引節用集の分類については、佐藤（一九八七）・同（一九九〇）を参照のこと。
- 2 なお、早引節用集A類の系統は佐藤（一九九〇）、E類の系統は佐藤（一九八八）・同（一九九二）を参照のこと。
- 3 このため、通し番号が¹⁰からはじまる。なお、欠けているのは『大全早引節用集』（天明八年初版、寛政五年再刊）だが、これは『増字早引節用集』と『残字』を合冊したものであって、本稿では別途『残字』をあつかうため、掲げていない。
- 4 「声」とは、早引節用集諸本の凡例で、語形を仮名書きしたときの字数の単位である。「声」とはいえ発音上の単位ではない。
- 5 『残字』の「凡例」に「今此書は前板に洩たる文字斗を拾ひ集て新に開板して早引残字節用集と号く」とある。
- 6 ただし、夕部四声の一覧では、基本語順の立て方が異なる。²⁰では、非増字本文・増字本文（一次・二次）の別を超えて頭字を同一とする熟字が連なるよう編集することが多いが、特に夕部四声「大□」においては、本文の別の超え方が奔放であった。そのさまを示すには、非増字本文から第二次増字本文までを示す必要があるが、そのために他の諸本の語順がわかりにくくなる恐れがある。そこで、夕部四声「大□」の一覧では、²⁰を除く諸本で基本語順を立て、その範囲で²⁰の語順を示すこととした。

〔参考文献〕

- 佐藤貴裕（一九八七）「早引節用集の分類について」『文芸研究』一一五
佐藤貴裕（一九八八）「冒頭に『意』字をおく早引節用集二種」『文芸研究』一一八
佐藤貴裕（一九九〇）「早引節用集の流布について」『国語学雑誌』一一一
佐藤貴裕（一九九二）「和漢音釈書字考節用集」の一展開『国語学雑誌』三三
佐藤貴裕（一九九〇）「早引節用集の系統について——A類諸本間における——」近代語研究会編『日本近代語研究』二 ひつじ書房。出版社の不注意により、論文中の表に致命的な欠陥が生じている。訂正分を同社より入手されたい。

語から文章へ

平成12年7月25日印刷
平成12年8月1日発行

© 2000 Yoshihide Endo

編 者 遠 藤 好 英

発行者 「語から文章へ」編集委員会

印刷者 東北プリント
〒980-0822 仙台市青葉区立町24-24
電話 022 (263) 1166

連絡先 東北大学大学院文学研究科
国語学研究室
〒980-8576 仙台市青葉区川内
電話・FAX 022 (217) 5988
